

演劇学論叢 第十六号抜刷

二〇一七年三月

# 日露戦争三十周年と芸能

—その実態と背景意図—

多田 英俊

# 日露戦争三十周年と芸能

—その実態と背景意図—

多田 英俊

はじめに

昭和十年は、日露戦争三十周年に当たる。この年日本は国を挙げて過去の顕彰に熱狂していた。数多の戦記本や写真帖の出版、各地での忠魂碑建立、軍神社の創建、造幣局による記念牌製造、さらには祝祭仮装行列まで登場した。考えて見れば、三十周年自体に意味はないのである。二十周年も二十五周年もなかったところへ、この時期—満州事変以降—に三十年を迎えたことを奇貨として、附会されたものなのである。そこには大きく二点に關し、重要な意味付けがあった。

第一は、国民精神の高揚である。文楽を例にとると、日露戦争時の景事において露艦爆沈を火花仕掛けで見せ、大正十三年録音忠臣蔵茶屋場の謎掛けに日本勝ったと吹き込んだりしたのは、当座の耳目を喜ばせる程度にとど

まるものであった。一方、日露三十周年を当て込んだ各劇団の新作にあつては、非日常的な劇場での感動が日常における精神の高揚と一体化するのである。

第二は、文化の対外宣揚である。日露戦争は近代国家日本の大陸進出を後押しする対外戦争であつた。その三十周年前年に発足した財団法人国際文化振興会は、明治以降の外国文化吸収から日本文化発信への方向転換を宣言した。宝塚少女歌劇において海外進出を目的とした作品が社長小林一三の自作として発表され、そこには、レビュー史上初めて浄瑠璃義太夫節と歌舞伎とが採用されたことも、その一端である。

これらの諸事象を連関的かつ総合的に捉えるため、本稿では、まず日露戦争三十周年当時の実態を、新聞各紙ならびに芸能諸誌から忠実に再現する。次に、それらの記事を分析することにより、事実の背景に存在した国家当局の意図や思想運動を浮き彫りにし、映画演劇等の芸

能が、古典演劇も含めて巻き込まれていた状況を明らかにする。したがって、具体的作品を取り上げた考察は、次回以降の研究課題としたい。

## 一 日露戦争三十周年の実際

戦前の記念日に、陸軍記念日（三月十日）と海軍記念日（五月二十七日）があった。前者は奉天会戦に後者は日本海海戦と関わり、いずれも、日露戦争における大日本帝国陸海軍の勝利を記念して制定されたものである。日露戦争三十周年も、主としてこの両日を契機として記念行事が企画され、マスコミも大々的に宣伝をした。まずその実際を、当時人々の情報収集と行動基準の中心を占めていた新聞から探ってみることにする。対象を「東京朝日新聞」〔以下、東京朝日と略記〕とし、「大阪毎日新聞」〔同、大阪毎日〕と、地方紙の「京都日出新聞」〔同、京都日出〕から、それを補う形での特徴的な紙面を列記する。煩瑣な印象を与えるが、事実としての紙面そのままを提示することにより、記念日とその前後の様相が一目瞭然となり、当時の状況が如実に立ち上がってくることを企図したものである。ただし、芸能及び広告面については、次章以下で別に扱う。引用に際しては、見出しを『』で記事は「」

で括り、改行は／で中略は…で示した。また、ルビを省略し、旧字旧仮名は新字新仮名に改め、昭和十年については、月日のみを示し年を省略したが、これは新聞記事以外の引用についても同様である。

### 陸軍記念日

#### 【東京朝日】

三月九日

二面

『忠犬ハチ公／死して博物館を飾る／人間の模範』

『開戦から戦勝まで／電報で飾る屏風／戦況を飛驒の山奥に伝えた／日露役銃後の熱誠』

『皇帝御親祭にて／満州建国慰霊祭／日満六千の英霊合祀』

『本社主催／日露戦争卅年／海戦座談会①』

十三面

『日露役・七將軍／輝く武勲を偲び／感無量の遺族』

／あす卅年記念、戦野に響く／新興帝国の行進曲』

『満州国皇帝陛下奉迎歌』（文部省作詞東京音楽学校作曲）

『ハチ公の銅像／花で埋まる／押寄せた焼香の人』

三月十日

二面

『本社主催／日露戦争卅年／海戦座談会②』

八・九面

『きょう征露卅年の陸軍記念日／臥薪嘗胆十年の肉弾／驕傲の荒鷲を屠る／世界驚倒の勇武日本／大戦小史』

『元帥展一巡記／大戦絵巻の中に／巨人大山の浮彫り／風格躍如の秘藏品／本社主催・於日本橋高島屋八階』

三月十一日

一面

『日露戦争卅周年／三老将に謁を賜い／祝賀式・行幸に映ゆ／閑院宮の式辞御朗読に／式場の感慨更に深し』

『全市に軍国調／宮城前に晴れやかな雑沓』

「早朝まず九段坂上靖国神社境内から揚げられる花火の爆音が、この祝日の火蓋を切つて、市民の足を街頭へ殺到させる」

「日比谷公会堂前、本所国技館前等で記念スタンプを押している小学生や、軍服の坊っちゃんの手をひいたお父さん達が目白押しに押しかけて葉書だの手帳だのを売出している」

「陸軍軍楽隊街頭行進は…「大陸軍」の新行進曲

を奏しながら…九段下から大正通りを経て須田

町、日本橋、銀座の街々、国旗に彩られ陸軍色にうづまった帝都に、さわやかな行進曲が春の日にとけて人々の胸を打った」

『卅年前の熱意で／現危局突破／南関東軍司令官声明』

「日露の役／満州事変／挙国一致」

二面

『本社主催／日露戦争卅年／海戦座談会③』

十一面

『征露卅周年の春宵／愛国の情熱結婚／エプロン姿の国婦会員と／馬古山討伐の勇士』

【大阪毎日】

三月十日

十五面

『回顧卅年／思いは新たに／きょう、天覧を賜う／死の直前の述懐書／奉天大戦の最中に自刃した／大越大隊長の壮烈な最期』

『今夜七時／本社講堂にて／日露役卅周年／記念映画会／主催大阪毎日新聞社』

『満州国皇帝陛下御来訪／記念切手とスタンプ』

【京都日出】

三月九日

三面

『陸軍記念日の催し／各所に』

「国威宣揚祈願祭／平安神宮」「国威発揚在満兵  
武連長久祈願祭／吉田神社」「戦死者追悼法会／  
知恩院」「招魂祭と従軍者の大会／仁和郷軍分会」

三月十日

三面

『天地をどよもし／近代戦術様相を示す／洛南に繰  
り展げる記念演習』

『義勇看護婦隊／決戦に活躍／日赤京都支部の訓  
練』

『雄々しい／少年戦士／成徳校武道大会』

「陸軍記念日の催し：柔道部、剣道部ともに猛烈  
な稽古や二本勝負、紅白試合等」

三月十一日

二面

『軍国にどよもす歓呼／日露役卅周年／巷は日の丸  
の氾濫だ』

「岡崎原頭大國旗の翩翩と翻る国威宣揚式場  
上空、紺碧の蒼穹に軽爆八機は銀翼を拡げて軍  
國の春を謳歌顔に快翔、碧空の下、都人は日露戦

役大勝の思い出も新たに豊頬を小麦色の健康色  
輝かしてどつと繁華街、さては陽炎燃え立つ若  
草の郊外へと繰出した。小旗をかざした市電、郊

外電車は鈴なりの超満員、植物園では萌出する  
緑に酔い、動物園ではライオンの卅周年祝砲に  
も似た咆哮に驚き、新京極は各館競って記念映  
画の上映に愛國の熱情を新たにし、桃山御陵参  
道は今更に明治大帝の偉業を仰ぐ人々の群が蜿  
蜒十数町に巨大な長蛇を描き、近郊は終日明装  
クリーム色の春衣に塗りつぶされた」

海軍記念日（記念式典、関連行事、回顧座談会、特別ラジオ番組

等は陸軍記念日と同様であるから省略し、海軍記念  
日に特徴的な記事のみ引用する）

【東京朝日】

五月二十六日

二面

『大海戦大捷の記念／海軍銀座を現出／空に乱  
舞、街に少年兵行進／軍部総動員で講演』

「海軍では記念日の当日およびその前後にかけ  
て、海軍本省から三十名、海軍大学から五十名、  
在郷軍人会から五十名の講演者を総動員し全国

三百十五地の公私団体、各学校に派遣し、軍民一致協力の秋を説き光輝ある記念日の意義を宣揚することに決定」

「横須賀少年航空兵六百名は午前十時新橋駅着で入京戦車、機銃側車と共に行進、銀座、日本橋を経て靖国神社に参拝、宮城遙拝の後帰還する」

五月二十七日

二面

『雪の富士山頂を／目指して三少年／Z信号旗と軍艦旗掲揚に』

「皇国の興廢をこの一戦にかけた日本海大海戦三十周年記念日の二十七日、富士山頂上へ軍艦旗とZ旗を掲揚して三十年前の非常時と現下の非常時を国民にしっかりと認識させるため積雪まだ深い富士に登山の計画を立てた日本海洋少年団」

五月二十八日

一面

『きょう卅周年／聖上水交社に行幸／大捷回顧の催し／挙国祝賀に湧く』

「聖上陛下には…畏くも日本海海戦当時をしのぶにぎりめし、数の子、なます等の海戦料理に御

箸をつけさせられ」

二面

『海国日本の偉容／見よ！空に街に／華やかな大行進／』五月二十七日』輝く銀座は／七色の花吹雪』

「日章旗と銀座連合会から出した軍艦旗を両手に持った観衆がメインストリートにどつと湧いた新橋から京橋へ…大通の両側を埋めた観衆はただ万歳万歳の連呼、商店からはまた軍艦マーチが流れる、君が代も流れる、百貨店の屋上から一斉に七色のテープが投げられた、ぎざまれた色紙、花吹雪が初夏の風に舞い降りる…轟然たる爆音を見ると空の精鋭百機が飛ぶ…外国人の撮影隊が『海国日本』の美しさに圧倒されて思わず万歳と手をあげた」

十一面

『三十年間の秘密／日露戦争当時既に／日本に…催涙弾』／海軍記念日に初めて洩らす／発明者の桜井博士』

「欧州大戦乱の時に発明されたと許り思われている…世界科学戦史上における輝かしい一頁だ」

【大阪毎日】

五月二十六日

二面

『大楠公六百年祭／忠魂永えに芳烈／きよう、湊川神社の盛典／燦！ 七生報国の大義／肅然襟を正す参列者三千』

『菊水、旗の氾濫／全神戸の感激／踊に花電車に歓喜の渦』

「大倉山と湊川神社境内との二ヶ所に設けられた奉納舞台には早くも歓喜に踊り上った人々が、楠公小唄に、隠し芸に喝采と拍手の渦を巻起している、全市にひらめく菊水の旗、幕、提灯」

『大楠公六百年忌辰／蘇峰生』

「我等は…公の湊川の一死に就て、公の実に日本男児の典型たる、而して特に日本男児の標準たる人格に憧憬する…公の如きは、我が日本国民臣道の模範である」

五月二十八日

二面

『きよう海軍記念日／陸戦隊堂々上陸して／大海戦を想う盛典／賢し東久邇宮殿下台臨／中之島上空に高等飛行鮮か』

「この朝六時家々には国旗と軍艦旗それに乙旗まきが薫風に翻り、中之島、天王寺両公園、ガス・

ビル階上には緑の空高く、祝海軍記念日」のアド・ヴァールンがスツクと浮いているなど、街々は記念日色の氾濫である」

『歓呼の街を行く／陸の、大観艦式』／本社主催大  
人氣の催し』

「午前八時から大阪城大手前公園広場に市内各一流会社、商店や本社作成の擬装軍艦四艦隊廿余隻の集結をもって開始された…十時御堂筋…音楽隊…マーチ…淀屋橋、梅田新道、桜橋、難波、日本橋筋三丁目、下寺町、谷町九丁目、上本町二丁目、谷町六丁目、…正午大手前に帰着」

『楠公祭に海軍色／港都、神戸の賑わい』

「この日の神戸は楠公六百年祭に海軍色を加えて一だんと賑わった」

【京都日出】

五月二十八日

一面

『海国日本五月晴れ／燦、將軍塚』に軍艦旗／京洛に大歓呼轟く／輝く戦捷めぐり来し卅年／海軍記念日の感激』

「將軍塚…約五百名の勇士の列が山頂に達したとき…低空飛行を行っていた各機が東郷元帥黒木

大将の手植の松近く老樹のトップをかすめんばかり「下げ舵」をとって天晴れな腕前」

## 二 日露戦争三十周年の意図

陸軍記念日と海軍記念日は毎年祝われるが、このように盛大な催しは空前絶後であった。これに比類する催しを現代日本で行うとして、それが困難を極めることは容易に想像できよう。例えば、その国家的規模や祝祭性として高揚感等に注目し、四年後の東京オリンピック開会式を想定するとして、紙面が同様の趣を示し、全国的ラジオ番組はテレビやインターネットの形で置き換えられるとしても、それと並行して全国各地でオリンピック関連行事が、男女も世代も問わず巻き込んで実施可能であるとは考えられない。加えて、この日露戦争三十周年に当たる両記念日の催しは、国民全員にイベントやアトラクションの受容という単なる受動的享楽者ではなく、当事者として能動的に参加することを要求し、実現させているのである。比喩的に表現すれば、人々の五感を覆い尽くす、無批判的快楽というモルヒネが蒸散された夢と魔法の国が、日常世界に現出していたのである。

そして、そこには当局の明瞭な意図が存在していた。

陸軍省新聞班は、昭和十年三月に「日露戦後三十年 非常時に対する我等国民の覚悟<sup>1)</sup>」と題する冊子を発行している。とはいえ、いわゆるお上からの通達は表面上遍く行き渡っているように見えても、実際は平身低頭する庶民の上を流れ去り、その心中に根付くことはない。そこで、その庶民を直接に対象とした書籍ならびに講演記録を併せ見ることに、人々の思考と行動にまで影響を及ぼした日露戦争三十周年の意図を探ってみる。書籍は、『少年日露戦争物語』(大同館書店、作者は芦間圭、新聞記者から文筆家に転じ、当時未成年者に対する啓蒙書を数多く著している。上巻が昭和十年四月、下巻が昭和十年六月発行ということからもわかるように、日露戦争三十周年を好機とし、陸海軍両記念日を意識して出版されたものである。講演記録は、昭和十年三月八日、財団法人京都府国防協会主催、京都市立堀川高等女学校での日露戦役三十周年記念講演「日露戦争の思出と日本の現況<sup>2)</sup>」で、講師は元第十九師団長陸軍中将森寿である。ちなみに、この講演は第一章に列記した新聞記事からもわかるように、軍部主導で派遣された講師陣によるものである。計画が確実に実行されていたわけだ。なお、並行検討する三誌については、その主要部分を注に引用することにより、考察における客観的根拠を明確にしておく。



一点は、現下日本の状況を日露戦争三十周年と結びつけることである。同年の満州国皇帝訪日の奉祝は、明治日本の躍進によるロシアへの勝利とその結果としての満州国建国と関係する。かつ、建国を認めない国際社会の圧力は、日本海海戦に大勝した帝国海軍の勢力を削ぐべき方向の、海軍軍縮会議にも現れている。

二点は、日露戦争の勝利が日本の伝統によってもたらされたものである。万世一系の天皇を仰ぎ、靈峰富士と爛漫たる桜花に象徴される日本精神は、軍民一体となつて義勇を發揮する。かつての大楠公から人間に非ざるハチ公まで、忠誠心は唯一無二にして範とすべきである。

三点は、日露戦争の勝利に貢献した人々とその背景にある犠牲的精神を想起させることである。東郷元帥、乃木將軍から一兵卒に至るまで臣道を全うしたこと。そして銃後の国民もまた軍国日本、海国日本の隆盛に心血を注ぐことを当然の責務と考える。

いずれも、日露戦争を過去の出来事として歴史の中へ埋もれさせることなく、現在に至る連続性を強調するものであり、日露戦争の勝利をもたらしした日本陸海軍の偉容を、あらためて誇示することでもある。それにより、上記三点は抑圧的ではなく発散的方向で享受され、自国

民に優越感や爽快感および昂揚感を抱かせ、自負心をくすぐることも可能にする。表面的ではあるが、それだけにわかりやすく民衆の心をつかみ、日常的鬱屈からの解放感さえもたらし得る。

このように、新聞記事ならびに冊子、書籍、講演という手段を用いて国民に伝達された内容を比較検討した結果、当局の意図は明確であり、日露戦争三十周年が巧みに利用されたことも間違いない。都新聞の記事に、「陸軍当局初め関係諸団体では全国的に本年の陸軍記念日をカーキ清一色で塗り潰そうと種々秘策を練っている」「講演に演劇、映画に、ラジオに、蓄音機に凡そあらゆる機関を通じて高鳴る軍国リズムを吹奏しようという」「陸軍では既に例のパンフレットを廿三万、つわもの編纂のリーフレット廿六万、絵葉書廿五万、ポスター三万七千を各軍師団、官庁、学校、有力民間団体に発送」云々とある通りである。

とはいえ、当局の意図が書き言葉や話し言葉により流されたものである限りにおいては、どれほど国民に浸透したかについて疑問が残る。確かに、第一章に列記した新聞記事を見ると、設定された諸行事に多くの人々が参加していた事実が浮かび上がるが、それがいわゆる動員(當時、各地域各町内という小単位でのまとまりが現在よりはるかに強

固であったことは、周知の事実である）によって、駆り出されたものと考えられる必要がある。その場合、民衆側すなわち下からの主体的能動的関与や参加が、普段の生活の中でなされていなければ、日露戦争三十周年は巨大なハリボテでしかなかったことになる。

そこで、次章においては、一般大衆が日露戦争三十周年を日常のかつ積極的に享受していた状況を、当時の代表的な芸能である、ラジオ番組、蓄音機レコード、映画や大衆芸能、さらには新聞広告というメディアを通して、具体的に検討する。

### 三 芸能における日露戦争三十周年

昭和十年は、新年早々から国民をお屠蘇気分のまま政治の世界へ引き込む広告が掲載された。例えば、「海軍軍縮問題展覧会」がそれである。京都では京都駅前丸物百貨店において、新年二日から十二日まで催された<sup>5</sup>。主催は海軍協会京都府支部と海軍省・舞鶴要港部、後援は昭和青年会と大阪朝日新聞京都支局。新聞社の後援であるから宣伝効果は十分であり、しかも有名百貨店の特設会場において行われるから、気軽な外出や買物物ついでに立ち寄ることができる。当然のことながら、この種

の催しは陸海軍両記念日においても企画され、東京で見ると、「日露戦争回顧展」が東京日本橋白木屋四階サロンにて、陸軍記念日当日から八日間行われた。キャッチコピーは、「満蒙は天日に輝く！想起せよ三十年の昔 皇軍の榮譽を 肉弾を！鉄血を！」と、陸軍省後援だけに、前述の意図が直截に表現されている。両者ともに、主催たる当局の強い要請があったと考えられるが、国民の関心が高まっていたことに間違いはない。実際、大阪でこうで開催された「無敵日本海軍展」は、「大好評に就き三十日迄会期延長」と広告されている<sup>7</sup>。

前者に関連して、海軍記念日における森下仁丹本舗の全面広告を取り上げる<sup>8</sup>。大阪を代表する企業である仁丹は、二ヶ月前の陸軍記念日にも全面広告を出しているが<sup>9</sup>、奉天会戦時の写真二葉を下部に配し、創売時を同じくするという奉賛記事であった。海軍記念日においては、両国最新軍艦図として日米の軍艦シルエットを、主力艦・航空母艦・巡洋艦（甲級・乙級）・駆逐艦・潜水艦に分類し、トン数と隻数まで詳細に掲載するという、徹底したものであった。現在であれば、専門誌以外お目に掛かることはなく、艦船名まで挙げる人間がいれば、それはマニアと呼ばれるに違いないが、尋常小学算術書にも軍艦や大砲が計算の題材として用いられていたことを考えると、

お茶の間で親子が艦船名当てクイズに興じていたとしても不思議はない。国民の日常生活のレベルで、海軍軍縮問題は日露戦争三十周年と密接に結びついていたのである。

後者についても、回顧記事に人気が集まっていたことは、時事新報社が元旦から連載していた「回顧三十年、日露戦争を語る」が、当初の計画を越えて継続し、とりあえず陸軍関係分を小冊子として発行するに至ったことからもうかがえる。面白いのは、日露戦争三十周年が金儲けの道具にさえなっていたことである。『偽軍医／日本海海戦談／看板に投薬』とある記事などがそれで、この種の詐欺がまかり通るというのも、一大ブームが到来していた証拠に他ならないのである。

さらに、大楠公六百年祭も、新聞紙上を賑わすとともに、国民生活へ具体的な形で入り込んでいた。東京朝日は、連載小説に大佛二郎の「大楠公」を掲載し、大鉄電車は、「六百年祭記念楠公遺跡めぐり」と称して、絵葉書付割引廻遊券を発売した。各企業がここぞとばかりに商魂をたくましくした一例として、次の広告も興味深い。サロミン胃腸薬は購入者への抽選特典として、大楠公像を湊川神社の神符付で用意し、応募者全員には「危機読本」なる小冊子を送付するとした。もちろん、購買意欲を惹起しよ

うとしたものであるから、ここにも流行現象があったと断言してよい。なお、大楠公六百年祭に関しては、次の記事も考慮に値する。<sup>13</sup>湊川神社で孝子節婦の表彰が行われ、東京から日露戦争時の陸軍大将児玉源太郎の姉久子が来神したというもので、前章で述べた当局の意図は、こういうところにまで徹底されていたのである。

次に、映画である。これに関しては『非常時意識は銀幕の面にも！／軍事映画大流行／陸海記念日と各社の陣容』とある記事が、当時の状況を的確にまとめている。主要部分を引用すると、「訪れた非常時に軍事映画は俄然大流行を来たし、昨年三映社から提供された欧州大戦の実写物——勿論雨は画面に降りしきる底の古写真だったに拘らず、驚異的大当りを得た外邦画方面では茲一、二年来軍事映画が続々製作され、しかも何れも又非常な好成績を記録したのである」「軍部の後援もあり、比較的製作費も少いので各製作会社はこれで大いに黒字を稼ぐであろうと期待されている」「今年のように陸軍記念日の催しが方々で大々的に行われる時には一般映画を出しても見込みがたたぬせいもある」となる。この記事を裏付けるべく、具体的に京都新京極の興行街がどういう様相を呈していたか探してみると、『軍事映画賑う／新京極興行街／国防思想宣伝に大童』『京極興行協会の申し合せに

より、各館、各座の番組に「国民よ、想起せよ！ 卅年前！ 忘るな三月十日——陸軍記念日を！」と大書して刷り込ませる<sup>15</sup>とある。映画界においても、軍産複合体が現出していたとまとめても過言ではない。

しかも、結果的に軍事映画しか選択肢がなかったというのではなく、観客から積極的な支持を受けていたという点が重要であり、映画会社も単に記念日前後の熱狂に頼るのではなく、年間を通じての客足の確保を巧みに企図していたのである。同じく京都新京極興行街の様相を見てみよう。新年早々京都日出一月十五日付三面は、全面が映画紹介記事であるが、新春映画としての「乃木將軍」がそれに相当する。まず、形態が「さきに発表されて驚異の人気を博せる「佐渡情話」に次ぐ浪曲界の第一人者寿々木米若の第二回浪曲トーキー」であり、配役が「乃木將軍には定評ある日活の至宝山本嘉一老が扮し、声涙下る名演技を示して吾々を泣かせ辻占売りの少年には名子役飛田喜美雄が出演」とあるからには、「愛国の熱血奔る涙の名篇」とする英雄伝の看板のみでは興行成績に不安があったと見るべきである。加えて、同時上映に「日活時代劇部総動員の超特作映画「水戸黄門」大河内伝次郎二役主演 原作大佛次郎 オールスターキャストの超豪華版」を配することにより、「正に新春映画界最大最強

力の番組」となっている。また、五月二十六日付三面掲載の新京極帝国館の広告では、「御家族づれで御覧になるには絶好の帝国館独特の名画揃い」として、「海国大日本」を「富士の白雪」そして「特選漫画祭」と抱き合わせで放映している。もちろん、創作映画ばかりではなく、松竹映画ニュース部においては、「極東戦線一万哩」（日露戦争三十周年記念記録映画）、「皇軍大海軍」（日本海々戦三十周年記念記録映画）を送り出している。なお、ここに「輝く大満州国軍」が加わっているところからしても、当局の意図は確実に伝わっていたと言える。

また、映画が重要なメディアとなっていたことは、当局自身が認識しており、『東郷元帥の声入り／トーキーを解放／文部省から各館に無償で貸与<sup>16</sup>』の見出し記事によると、文部省が直接撮影した東郷元帥の国葬をはじめ、元帥が写っているあらゆる方面の映画をつぎ合せて完成させた全四巻のフィルムを、五月二十二日からの二週間、東京市内の常設映画館をはじめ大阪名古屋等の大都市においても、一斉上映した。映画においても挙国一致の方策が施され、老若男女すべてを取り込むことに成功していたのである。

第三はレコードである。『レコード界も軍国の春を謳歌／街に流れる勇壮なりズム／昨今の物凄い売れ行き』の

見出しの下、「(一)四、五日の間に送り出された軍国物レコードがざっと冊種を超える」「売行きの止まっているはずの浪曲「常陸丸」や軍歌「ここは御国を」までも在庫品から一躍明るみへ持出され」との記事が、端的に当時の状況を描写しており、これ以上の説明は不要である。ただし、注意しなければならないのは、それら軍国物レコードがいわゆる統制的側面を持つていなかったことである。これに関連して、音楽評論家堀内敬三は「満州事変、上海事変がすべての日本人に非常時を認識させた。此の緊張した感じを和らげるためにレコードは相当の働きをしている。芸妓歌手の流行もその現れであった。単純な舞踊を伴う音頭類の流行もその現れであった。民族主義、国粹思想がその根底をなしているが、表面的には享楽的に富んでいたものが非常時に於けるレコードの特色であった」と述べている。すなわち、日々の楽しみとして享受されていたからこそ、一大流行を見たものとしてとらえるべきなのである。もちろん、流行には仕掛け人がいることも忘れてはならず、先に引用したレコードの記事はその冒頭で「何でもかんでも流行りそうな物なら、詩にして、歌にして、ジャンジャン売り出してレコード屋さん、この日露戦役卅周年記念日を見逃すはずがない」と記している。いわば、当局の意図が再生産され

る仕組みが整っていたのである。

さて、蓄音機の普及もさることながら、スイッチを入れると情報が流れ続けるラジオこそ、戦前日本における最大の媒体である。当時、ラジオの聴取者は五月三日に二百万を突破し、これを機にラジオ聴取料も四日から七十五銭が五十銭へと値下げされ、更なる顧客獲得を目指していた<sup>19</sup>。そこで、海軍記念日当日である五月二十七日の主たる番組を、各新聞のラジオ面によってたどりながら、ラジオにおける日露戦争三十周年の実態を明らかにする。その際、当日までの特徴的番組も合わせて見ていきたい。

まず、朝六時放送開始のラジオ体操に続き、号音と軍歌「日本海海戦」等が六時半まで流れる。八時から小学生の時間として、全学年対象の朝礼訓話「日本の軍人は何故強い」(海軍大将加藤寛治)が三十分間。正午過ぎには琵琶曲「広瀬中佐」が、午後六時からの子供の時間は、物語「日本海大海戦」が演じられる。午後七時半以降は「海軍の夕」と題されたアワーとなり、軍事参議官の講演「日本海海戦を回顧して」、人気歌手を並べた「海の歌謡曲」、ラジオドラマ「雄魂帰る」(大海戦挿話)、海軍軍楽隊による吹奏楽、と九時半まで通される(九時半からはニュース、気象通報、経済市況で放送終了)。第二放送においても、レコー

下音楽「英雄交響曲」「戦士の行進曲」、最近外交史「日露戦争から華府会議までの極東外交」、今日の知識「大楠公と仏教信仰」のように、洋の東西や学問のジャンルを越え、硬軟取り混ぜて放送するという徹底ぶりである。地方局枠の時間帯も、「日本海海戦と沖繩五勇士」（大阪）、「東郷元帥の趣味を語る」（名古屋）、「日本海海戦記念式典実況―福岡市宮崎宮より」（福岡）等という具合であった。

海軍記念日に先立つ五月二十五日は、大楠公六百年祭であり、それに関連する番組も数多い。五月八日に名和長年公六百年記念祭を鳥取名和神社より実況放送し、子供の時間には童話劇「名和長年」を、夜には俚謡として「伯耆民謡まで中継している。続けて琵琶曲「噫東郷元帥」を放送するところに、日露戦争三十周年との関わり方の一端がうかがえる。二十一日からは子供の時間に国史物語「大楠公三部曲」を三日連続で放送しているが、その題名が、「楠の若葉」「菊水の旗」「七生報国」となっていることに、物語の主眼が明瞭に察せられる。二十二日からは大楠公史蹟巡りとして正午前の一時間を中継放送に費やしている。先に述べた大鉄電車発売割引廻遊券との相乗効果は抜群である。その第三日は「家庭の大楠公」と題して河内の楠枇庵から作家大佛次郎が講演しているが、その趣旨を「私は伝説を中心として文芸に取扱われ

た楠公をお話ししたいと思う：それは日本人の国民的理想、或は日本の民族性などと聯関<sup>20</sup>として考えられる所の力強い大楠公の精神を語る事である」と述べている。この方法は実に巧みであり、道徳的訓話を垂れるという説教的側面は薄められ、觀光の楽しみと国家的自尊心のくすぐりにより、人々が進んで大楠公に接近することになる。

祭当日の二十五日には、本居長予作曲の明治天皇御製その他楠公父子の唱歌演奏、国文学者島津久基朗読の太平記「七生報国」、婦人の時間として文学博士中村孝也の講話「婦道の精華楠公婦人」がそれぞれ放送され、理性や感情、性別や年齢を網羅した放送体制が組まれていたことをうかがわせる。翌二十六日は、河内観心寺での大楠公六百年祭大法要の中継、夜には実川延若一座による新作ラジオドラマ「湊川」と、梅若流謡曲「夜討曾我」が放送され、古典的かつ格調高い番組作りもまた心掛けられていたのである。

なお、三月十日の陸軍記念日については、『輝く陸軍記念日』日露戦争卅周年／第一第二放送を挙げ／當時を偲ぶ様々な贈り物』「特別番組を組み当時は回顧すると同時に、非常時局に際して、皇軍の威容と国民的士気を宣揚することになった」との、東京朝日六面の記事でまとめ

られる。

最後に、大衆芸能について。「先頃の日露戦役三十周年記念に、いろんな軍事劇が各座に上演された」とあるように、各劇団は総力を挙げて取り組んだ。新派総動員の「元帥大山巖」（陸軍省後援）、曾我廼家五郎劇は「海戦秘話敵艦見ゆ」、この両者は劇場からラジオ中継までされた。新国劇の「新兵行進曲」、さらに花月劇場の人気スターであった辻野良一の一座は「肉弾明治三十七八年を偲ぶ」を演じている。ここにおいても、日露戦争が満州事変以降現在の軍国気分と緊密に結び付いており、三十周年記念の意図が明確に打ち出されていると言える。

その他としては、大阪堀江演舞場で三月十日に開幕した「この花踊り」が、「廓曾我」を取り上げたことを、「こ」として主題を時代精神を反映して、勇ましく花やかな曾我兄弟の孝心を歌舞伎畑から取材した」と書く記事が興味深い。変わったところで、『お座敷にも／海軍記念日／三花街の美妓が／非常時サービス』との見出し記事を挙げておく。新橋、五反田、大森海岸の芸妓組合では、海軍記念日当日にZ旗徽章を胸間に佩してお座敷を勤め、「一朝事あらばの心がけ」（同）を示したというのである。これなどは、お座敷遊びの趣向の一端に過ぎないが、それゆえに、統制だ禁忌だと窮屈で排他的な形ではなく、

日露戦争三十周年が、明るく楽しく華やかに人々の心に浸透していた証拠だとすることもできるのである。

とはいえ、児童生徒に対しては、徹底した教育が施されていた。京都の例を挙げると、三月の陸軍記念日当日は、「府立第二高等女学校全校職員生徒は午前九時伏見桃山御陵下に参集の上、御陵前に、さらに乃木神社に熱祷を捧げた」とあり、五月の海軍記念日と大楠公六百年祭に当たっては、京都府学務部長から各学校長あてに、記念行事と精神徹底に関する通牒が出され、事実、京都府立京都第一中学校においては、軍人による記念講演が行われ、楠公の遺跡を巡る修学旅行が実施されたのである。この京一中における昭和十年の諸行事を、日露戦争三十周年に焦点を絞って列挙すると以下ようになる。

三月八日 放課後講堂にて日露戦役三十年記念映画会を開く。同窓会員も多数参観せらる。

三月九日 午前八時三十分より日露戦役三十年記念講演会を開催。講師第十六師団司令部古城少将閣下。午前十一時より本校職員卒業生の日露役戦歿者慰霊祭を執行。

四月十五日 午後四時半全校職員生徒満州国皇帝陛下を奉迎す。

四月廿三日 午後二時より中村直勝氏を聘し楠公に

関する講演会を開く。

四月廿六日 全校職員生徒河内大楠公史蹟見学旅行をなす。

五月廿四日 午後一時より海軍記念講演会。講師本校卒業横地錠二少将、同朝永研一郎大佐。

九月十八日 満州事変四周年記念野外演習に四、五年参加。

この他に、毎年恒例の、新年拝賀式、紀元節拝賀式、天長節拝賀式、教育勅語捧読式、明治節拝賀式が入る。

これにより、第二章で述べた日露戦争三十周年の意図、すなわち、現下日本の状況を日露戦争三十周年と結びつけ、日露戦争の勝利が日本の伝統によるものと認識し、勝利に貢献した人々とその犠牲的精神を想起させることが、諸行事中に凝縮され体现されていることが見て取れるのである。これらの教育を受け成人となった国民が、来たるべき支那事変以降の戦時体制下にとどのように組み込まれていったかは、ここで改めて述べる必要もあるまい。ただし、講演速記録を見ると各所に「笑」と記され、修学旅行体験記にも充実感が見て取れることから、児童生徒の心をうまくつかむ工夫がなされていたことに注意すべきである。

#### 四 古典芸能における日露戦争三十周年

歌舞伎や人形浄瑠璃文楽においては、この年に取り立てて新作が演じられてはならず、日露戦争時および満州事変当時に創作された旧作の再演も見られない。実際、歌舞伎においては一月に十四代目守田勘弥襲名興行が、三月には五世尾上菊五郎三十三回忌追善興行があり、後者は翌月にまで持ち越すほどで、日露戦争三十周年とは無縁であったと見える。しかし、これは表面的な見方であって、歌舞伎や文楽はこの時期にわざわざ新作を上演する必要はなく、むしろ、耳慣れ目慣れた古典を掛けておけばよかつたのである。「ことに昨今、日本精神興隆の声高く、わが国伝統の美点である忠孝の本義が尚ばれる時代に際し、古今の忠臣孝子の事績を演ずるのは誠に意義深いことで、春を寿く芸妓のたおやかな手振りに陶醉されるとともに、こうしたテーマを選んだ意図をあわせて認識して戴けば幸甚である」と、前章最後に言及した「廓曾我」の上演趣旨にある通り、古典作品こそが、日本精神の本義を体现するものとされたからである。通し狂言「仮名手本忠臣蔵」を上演する浪花座の広告に、「日本精神の作興を目指して花形俳優の報国的熱演<sup>29</sup>」とあるのも、



当局向けの配慮ではなく、上記精神を確認することで観客を呼び込む、つまり日露戦争三十周年の庶民への浸透影響力を十二分に利用したものである。

とはいえ、日露戦争三十周年における当局の意図は、古典芸能界にも確実に反映されていた。『浄瑠璃雜誌』は、昭和十年一月から七月まで、隔月刊の四号（三三七―三四〇）すべてに、大楠公関係の記事を掲載するとともに、日露戦争を題材とした新作浄瑠璃「水兵の母」（作文作曲…竹本源福太夫）や、日清戦争時に創作された浄瑠璃「二葉楠」（作文…海軍中将小笠原長生）を収録している。歌舞伎座では四月十日に東京市主催で、「満州国皇帝陛下奉迎式余興演劇」と題して、「勸進帳」（歌舞伎十八番）と「紅葉狩」（新歌舞伎十八番）が、本公演に追加する形で建てられたが、この歌舞伎舞踊（所作事）が選定されたところにも、明瞭な狙いが見て取れるのである。

昭和九年四月に設立された財団法人国際文化振興会は、日本文化に関する正確な知識理解を世界に普及し、外国人の興味関心を惹起するための事業を推進する団体であったが、その設立には、「殊に国際聯盟脱退通告後は世界に対し、我が国の真価を認識せしめなければならぬ」という意見が多方面に強調せられ、時を同じくして外務省に於ても、仏蘭西その他欧州諸国の例に倣い、政府に国

際文化局を設置しようという運動が起るに至った<sup>30</sup>という切迫した事情があった。そこで、白羽の矢が立ったのが、踊りの名手六代目尾上菊五郎であり、会設立後わずか二月で、菊五郎演ずる「鏡獅子」をトーカー化する事となった。結果的には一年後撮り直しとなったが、その際の談話に、「今度は国粹芸術を海外に紹介するので、外人が観て退屈するような点などを訂正し、アレンジし直して「映画的な鏡獅子」にしたいと思っています<sup>31</sup>」とあるように、これこそがまさに振興会すなわち当局が求めていた日本の古典芸能なのであった。

菊五郎はまた、自身が文化使節となって欧米へ赴くことも決まっていた。まさに、日本代表として文化の対外宣揚を体現する存在であったのだ。これに関しては彼自身の発言が残されており、相応の覚悟を抱いていたことがうかがえる<sup>32</sup>。

最後に、人形浄瑠璃文楽を題材とした映画、これより五年後の昭和十五年九月公開、「浪花女」（溝口健二監督）を取り上げておく。フィルムは失われてしまったが、その脚本は松竹大谷図書館に保存されている。そこに記された制作意図は以下の通りである。

厳正なる表現をもつ日本固有の芸術人形浄瑠璃に働

く人達の心身もって只芸道修業に生きる姿を明治中期に至らんとする雰囲気の中に表現し、三味線の名手豊沢団平の良き内助者千賀女を通じて名作「壺坂靈験記」完成の蔭に当時漸く個人主義となつて実を結んだ外国思想が国民性の底に流れる犠牲的精神の美しさの前に脆くも潰え行く様を描きもつて日本精神の崇高さを謳歌せんとするものである。

この文章の後半、個人主義云々以下の部分を、制作年代からして、戦中の文化統制下、当局の検閲をすり抜けるための空疎な方便であると結論付けるのは簡単だ。しかし、ここまで日露戦争三十周年の実態とその背景意図を探った結果としては、最後の一節がそのまま昭和十年における当局の意図そのものの表現として、むしろ自然に受け取られるのである。すなわち、日露戦争三十周年は見事にその役目を果たしたと言える。古典世界と日露戦争、日露戦争と現代日本が一体化するという、社会科学的には考えられない状況が現出することになったのである。

それは一般庶民においても同様であった。古典芸能である歌舞伎の役者、初代中村吉右衛門へファンはこう呼びかけている。

吉よ知る人ぞ知る思うまま進んで呉れ。名優となれば成る程攻撃者の出るのを覚悟して偉人乃木將軍の旅順に於るを見よ。全国老若男女の非難の中心に居られ、ついに難攻不落の城も陥れ彼の名声と永久に軍人と名を残されたではないか。

吉右衛門は日露戦争当時わずか八歳である。三十八歳の自分が配役でもない乃木將軍にたとえられるなどは思つてもみなかつたであらう。

#### おわりに

少年時代、密かな楽しみの一つが、物置小屋にある戦前の書類を集めた行李の中から、封書や葉書を探し出すことであつた。当時流行していた切手収集に関わる行為である。その行李には、一冊の写真帖が収められていた。中を見ると、ところどころに見慣れた写真があり、その代表が、艦上で指揮を執る東郷元帥の図であつた。三笠小学校に通い、吹奏楽練習のため海上自衛隊総監部大講堂まで出かけていた者にとつて、それが日露戦争に関する写真帖であり、明治末の資料なら貴重なものであるこ

とも容易に理解できた。しかし、発行は昭和十年とあり、単なる復刻版であったかと落胆した覚えがある。

これこそがまさに、論考中に言及した、日露戦争三十年記念写真真帖であったのだ。とはいえ、あらためて思い返すと、ずいぶん小型で頁数も少ないものであった。各種図書館に所蔵されているのは、落成間もない軍人会館に東京朝日と大阪毎日という二大新聞社が関わって共同発行した、大日本帝国謹製とでも呼ぶべき品である。とすれば、実家のものはそれを模した地方新聞か下部組織発行のものだったのではないか（今となつては調べようもないが）。そして、軍港とはいえ一地方都市の、取るに足らない折箱製造屋までもが購入していたということは、日露戦争三十周年の奉賛気分がいかに帝国の隅々にまで浸透していたかという、一つの証拠となるであろう。

平成十六年は日露戦争百年に当たり、様々な取り組みが行われた。百周年として当然である。ところが、十年後平成二十六年にも、主としてアジアの戦勝国日本という方向から、百十周年が記念された。ちなみに、十年刻みの記念がそれ以前において行われたことはない。本研究は八十年前の一事象を考察するにとどまらず、現在・近未来日本の方向性に関して、有用な示唆を与えるものとなるはずである。

※本論攷は、独立行政法人日本学術振興会平成二十八年度科学研究助成費（奨励研究）として採択された、課題名「古典芸能における日露戦争三十周年―国民精神の高揚と文化の対外宣揚―」の研究成果として、公表するものである。

## 注

(1) 一、はしがき

日露戦役は我が国曠古の大戦であり、空前の試練であった。本戦役に於て、前古未曾有の大勝を得たことは、明治天皇の御稜威によることは勿論であるが、又国民拳国一致の熱誠と、我が陸海軍の勇武とが与つて力のあつたことは申すまでもない。

爾来三十星霜、此の間皇国は、世界大戦に参加して五大強国の一に列し、満州事変に於ては、満州国の建国により東洋平和の礎石を築き、今や名実共に東亜の重鎮として、はた又世界最強国の一として、道義日本の精神を世界に宣布し、真の人類恒久平和に寄与しようとしている。

然るに、満州問題を繞つては、端なくも国際聯盟と意見の扞格を来し、遂に之を離脱するに至り、我が国の真意を理解せず又我が国の飛躍発展を嫉視する列強と対立することとなつた。更に皇国最近の海外貿易の進展は、国際的経済不況と国

内不安に喘ぎつつある列強の羨望する所となり、延いて我が発展阻止の策謀となつて現われつつあるのである。

此の秋に方り、我が国連の進展を左右すべき海軍軍縮會議は、愈々本年中に開催を見んとし、而も其の前途は極めて多難であり、其の推移如何に依つては、或は重大なる情勢を誘致するやも図り難い。又蘇国は第二次五年計画を將に完成せんとし、著々として極東の戦備を充実し、その動向亦計り難いものがある。

又友邦たる支那は此の間に在つて、口に日支提携の必要を唱えつつも、事實に於ては依然として排日、抗日の態度を棄つるに至らず、以夷制夷の伝統的政策によつて我が国に対しつつある現況である。

以上は、日清・日露戦争を契機として生じ、更に満州事変に依つて愈々強化し來つた我が国力充実發展に伴う所謂一九三五、六年の対外非常時の大観である。此の時に當つて、熟々我が国内の現状を観るに、欧米個人主義文化の影響は、我が政治、經濟、思想等国民生活の万般に亘り行詰りと不安とを醸成しつつある。即ち我が国は今や内外両方面に亘る非常時を控えて居るのであつて、国内危機の淵源は誠に深く、之が改善には異常の努力を要し、又対外危局は我が国の飛躍發展を続ける限り、又列国が我が真意を理解するに至らざる限り、将来長期に亘ることを覚悟せねばならぬ。深く思を此に致すことなく徒に非常時の解消を唱え、或は之を回避せんとするもそれは徒爾である。宜しく我が国内外の大勢を達觀し、非常時の由つて來る所以と其の本質とを究明すると共に、皇国の使

命と国民的理想とを十分に認識把握し、内は速に国内の禍根を除き、皇道国家たるの実を挙げ、外は皇道的世界政策を實現し、以て皇国の生成發展と世界の福祉とを招來し、我が祖先の偉業を紹述せねばならぬ。

(一) 四頁

(2) はしがき

ある大学生が、

『僕らは、日露戦争というものについては、ほとんど、何の知識もなく、従つて、何の興味もたない。何故というに、あの事件は、歴史の教科書の、一ばんおしまいごろにあつて、時間が間にあわずに、いつでも、習いそこねてきたから……』

ということでありました。たしかに、それが実情でありましょう。けれども、果して、それでよいものでしょうか？ いやさ、学校でおしえられないから知らない、ですましておつていい問題かどうか、というのです。

断じて、いけない！ 日露戦争は、現代の日本人にとって、欠くことのできない知識であります。それを知らないでは、欧州大戦も、華盛頓會議も、満州事変も、何もかも理解することができません。実に、日露戦争は欧州大戦の遠因であり、欧州大戦は華盛頓會議の原因であり、華盛頓會議は満州事変の近因であるのです。

寧ろ、さらに一步をすすめて、日露戦争の感激こそは、日本たるの資格に、欠くべからざる精神的要素であると、私はいいたいのです。思えば、日露戦争当時の、日本および日本

人は、一つのすばらしい結晶体でありました。純粹な、感情の化合物でした。古來伝統の文化は別として、現代日本のもつ自信と矜持と勇氣とは、実に、この日露戦争の記憶、その感激の感銘においてのみ、可能なのであります。

御覽なさい。不安と、卑屈と、自棄とに、輕差妄動する輩は、日露戦争当時の、あの高貴な感情を経験しないものに、ほとんど限られています。あの莊嚴な、悲壯な感激の洗礼を経てきたものは、戦闘員たると非戦闘員たるとわず、死生の境をくぐってきただけに、必ず、一種独特の胆力と自信とをもっています。見苦しく焦燥をせず、不甲斐なく悲觀をせず、卑しげに自屈しません。大死一番を経たものに特有な、頼母しい底力をもつていて、余裕綽々として卓立しております。

極言すれば、日露戦争の感情こそは、日本の生命である。その知識は、詳細に叙することによって、どれだけ深くも、与えることができません。けれども、このすばらしい感情を、一冊の書によって、實際の経験者と同様に、若い未経験の胸に刻みつけ、感激感銘させようというのは、およそ無理かも知れません。しかもなお、それは必要であります。日本人が、真に日本人の面目において活躍し、日本が、真に日本の姿において發展するためには、ぜひとも必要な工作であります。

幸に、最近の滿州事変によって、幾分なりとも、それに類似の感情を、若き次代の國民は味っております。また、征露三十週年をむかえて、日露戦争を中心に、日本の自主独立への急速なる發展の跡をかえりみ、日本および日本人の眞の姿を、再認識しようとする機運が、近頃つよく動いてきており

ます。この機会に際し、この機運に乗じ、能うかぎりの感銘を与えることは、執筆奉公をもつて念願とする者の義務であると信じ、自ら揣らず、この不可能にちかい野心的な工作に、敢えて当つた次第であります。蓋し、多少ともその工作に成功し、必死必忠を期した、かの征露感激の幾分かを、青少讀者諸君に与えることができれば、ただにその当人にとつて、安心立命の幸福となるのみならず、また日本の世界一統、昭和維新の花をして、確實に実を結はせる虫媒作用となることを、堅く強く、全靈的に信ずるが故であります。(以下略)

(一—三頁)

### (3) 第三 日露戦後現在に至る迄の概要

#### 二 開戦

#### 6、戦勝の主因

前に述べました如く日露戦争に於ては我が兵員は少く兵器彈藥器具材料皆敵に劣りしに拘らず大勝を得たのは何故でありますか、明治天皇の御稜威に依ることは勿論統帥の優秀、軍隊の精練、特に正義に氣負う國民の後援、要するに國民の挙国一致の精神力即大和魂の團結が勝つた、日本精神が勝つた勝利の主因は國民の挙国一致の精神力即ち團結せる大和魂、日本精神の力と謂わねばなりません。(三十八頁)

#### 第四 日本の現況、所謂非常時局

#### 二、非常時局は寧ろ今後に在り

(四十一頁)

(略)

#### 第五 非常時局対策

三、平時の戦争に勝利を努むる事

現代の戦争は昔の如く武力一点張りではありませぬ武力戦、経済戦、思想戦、外交戦（政略戦）の四要素の総合でありまして武力戦の外は平時より起つて居るのであります此平時の戦争に敗けないことが極めて必要であります経済戦に勝つ為には国民が皆能く働きて先刻御話をした日露戦争の時の様に女も子供も老人も総て奮発をして活動し先ず自家の経済力を向上する、そうして国の力が向上する様にする思想戦の如きは大和魂日本精神の鍛錬に依りて勝を制し外交戦は完備せる国防を後楯として国民の十分なる後援に依りて手を屈服せしめねばならぬ此等の根本策としては健全なる国民の養成が必要である。

（以下略）

（四十七頁）

第六 結言

六、最後に故語金言を紹介したいと思います。

有備無患

居治不忘乱

国雖大好戦必亡天下雖安忘戦必危

昔の人はいまのことを謂うて居ります戦を好むのは宜しくありませぬがふりかかると火の粉は掃わなければならないのであります。

日本国民たるもの最も健全なる国民として有事の日に備うるの準備をなし国家の興隆に当らなければなりません正に三十年前の気持を復活することが肝要であります。

（四十九、五十頁）

（以下略）

- (4) 「都新聞」三月六日付十三面
- (5) 「京都日出新聞」一月一日付二面
- (6) 「都新聞」三月十日付十四面
- (7) 「大阪毎日新聞」五月二十六日付三面
- (8) 「大阪毎日新聞」五月二十七日付十六面
- (9) 「大阪毎日新聞」三月十一日付四面
- (10) はしがき「回顧三拾年日露戦争を語る陸軍の巻」(時事新報社、昭和十年三月、二頁)

(11) 「自分が日露海戦当時千葉県の日本赤十字社支部の救護班員として選ばれ御用船に乗込んでいたことから海軍軍医上りと詐り海戦当時の状況を話しては散葉を一週間分七十銭から五円までに売りつけ東京、千葉、神奈川方面を行脚していた」(東京朝日新聞)五月二十七日付十五面

- (12) 「都新聞」三月七日付六面
- (13) 「都新聞」五月一日付十二面
- (14) 「都新聞」三月六日付五面
- (15) 「京都市出新聞」三月十日付三面
- (16) 「都新聞」五月二十一日付十四面
- (17) 「大阪毎日新聞」三月十日付十五面
- (18) 「レコード十年(三) 日本人の音楽的優越」(「都新聞」五月二日付一面)

- (19) 「都新聞」五月一日付十三面
- (20) 「都新聞」五月二十四日付九面
- (21) 「こんな芝居も見せたもの」(「演芸画報」昭和十年六月号、七十二頁)

(22) 「東京朝日新聞」三月十日付十七面

(23) 「都新聞」五月二十一日付七面

(24) 「京都日出新聞」三月十一日付一面

(25) 「陸軍及海軍記念日」ニ際シテ八年々軍事ニ関スル講話其ノ他ノ方法ニ依リテ之ヲ記念シ以テ国民精神ノ涵養ニ資セラレツツアリト存候ヘ共今年ハ恰モ明治三十七八年戦役三十周年ニ相当スルヲ以テ特ニ適當ノ期日ヲ選ビテ之ガ記念行事ヲナシ以テ忠君愛國ノ精神ノ振作ニ努メラレ度(以下略) (明治三十七八年戦役三十周年記念行事ニ関スル件「京都府公報」通牒及照会、十学第一六七〇号、昭和十年五月二十一日)

「本年ハ楠木正成ノ戦歿後六百年ニ相当セルヲ以テ之ガ記念行事ヲ企画実施シ居ラルルコトトハ存候ヘ共本月二十四日ヨリ二十八日ニ亘リ湊川神社ニ於テ之ガ式典ヲ執行ハルル次第モ有之此ノ際楠公ノ精神ヲ一層深ク国民ニ徹底セシムルコトハ極メテ時宜ニ適シタル企ト被存候ニ付講演其ノ他適當ノ方法ヲ講ジ国民精神ノ作興ニ資セラレ度(以下略) (楠公ノ精神徹底方ニ関スル件「京都府公報」通牒及照会、十学第一七一四号、昭和十年五月二十八日)

(26) 「学友会誌第四十九号」(京都府立京都第一中学校学友会、昭和十年十二月)

(27) すべて「同窓会誌」(京都府立京都第一中学校同窓会)掲載「母校記事」欄による。なお、号数と頁数および発行年月は以下の通りである。

一月一日〜二月十三日「第四十九号」(昭和十年二月、七〜八頁)、  
二月十六日〜五月廿四日「第五十号」(昭和十年六月、三十一〜三十三頁)

一頁、六月八日〜十一月三日「第五十一号」(昭和十年十二月、九〜十頁)。

(28) 「堀江の特色と」時代精神の発露を／堀江廓副取締山村庄太郎 (「東京朝日新聞」三月十日付十七面)

(29) 「大阪毎日新聞」五月二十八日付九面

(30) 「財団法人国際文化振興会設立経過及昭和九年度事業報告書」(国際文化振興会、昭和十年七月、四頁)

(31) 「国際文化振興会」柳沢健氏談「海を越える日本芸術の粹」菊五郎の「鏡獅子」／国際文化振興会の依頼で／来月トキーニ／小津氏の監督で本格的に撮影」(「都新聞」五月二十四日付七面)

(32) 「欧米行きも伊太利とエチオピアの戦争で延々になりました。あれは私が主唱したのでなく、外務省からの依頼で、お国のお使……として行く訳なんです。一行は総てで約五十人で、其メンバーも既に定って居りますが発表するわけにはいきません。多分此秋に行くことになりましょう。最初はアメリカから欧州へ渡る筈でしたが、いろいろな都合で逆のコースになる様です。行くからには十二分に日本の芸術を見せて、向うの大官方にも逢い、国交親善の為全力を尽したいと思えます。」(「欧米芝居行脚 尾上菊五郎」『俳優総出百人百話』、「演芸画報」昭和十一年一月、四十二頁)

「なお、昭和十年頃に、菊五郎が相当長い期間、歌舞伎座の舞台を離れることは、不可能だったと思う。その前年あたりから、彼は日本一のこの劇場の、実質上の座長であった。」(「戸板康二」代目菊五郎、昭和三十一年四月、演劇出版社、百八十九頁)

(33) 「読者倶楽部」『演芸画報』昭和十年九月、八十頁

